

2018（平成 30）年度 神戸親和女子大学附属親和幼稚園学校評価について

神戸親和女子大学附属親和幼稚園は、2016（平成 28）年 4 月に開設されました。

学校法人慈愛学園様が育ててこられました教育の理念や方針を継承するとともに、さらなる幼稚園教育の充実を目指し、3 年間努力してまいりました。今年度、はじめて親和女子大学附属親和幼稚園として 3 年間過ごした修了生を送り出しました。

日常的に神戸親和女子大学とさまざまな連携をしながら、その専門的性や多様な視点から意見を聞き「学校評価報告」を作成しました。このたび神戸親和女子大学幼稚園運営委員会において承認されましたので公表いたします。

学校評価表の項目といたしまして、「子ども一人ひとりの自立に向けた力を伸ばす」、「子育ての支援」、「教員の資質向上に努める」、「特色ある幼稚園づくりを目指す」、「家庭地域との連携」、「情報を発信する幼稚園」、「幼稚園経営」を掲げています。

さらに「重点目標」とその内容の「取組の状況・成果・課題」を前年度のふりかえりとして経年記述をしました。それら进行评估し、「改善策」と学内の「幼稚園運営委員会」でいただいたご意見を表記しています。

昨年度は幼稚園教育要領が改訂になり、職員間での研修や神戸親和女子大学教員からのレクチャーも受け、今までの保育・教育を見直し、取捨選択しながら園児の興味関心を高める環境を整えてまいりました。環境による知的好奇心を育む自然との関わりや人権を大切にすることを共通理解とし保育内容を考えてまいりました。

海外からの訪問者が多い一年でした。カナダ、イタリアは例年通りでしたが、中国からの来園者は 5 回を重ねました。園児は多文化を心地よく受け入れ、園生活を見ていただくことに喜びを感じていました。それは Tim 先生による 2 年間の「英語で遊ぼう」のクラスで歌ったり表現したりを積み重ねてきた結果であると思います。

また、昨年より各教室に観察用ルーペや重さと量の確認のためのキッチンスケールなどを設置し、子どもが自ら興味を持って取り組めるようにいたしましたが、今年度は各クラスのデジタルカメラを配布し、子供の興味関心を記録した。子ども自身が映したすばらしい記録はドキュメンテーションとして記録を重ねています。

引き続き、個々の子どもの人権を守るため保育を再考し、隠れたカリキュラムに注目いたしました。呼称を小学校以降と同様に「～さん」を使い、単に色で分けることや男の子と女の子を異なった扱いをしないことにも取り組みました。

一人ひとりの命が輝くように子どもたちを大切に育て、保護者・地域・大学関係者等と共に連携しながら精進してまいりますので、今後とも神戸親和女子大学附属親和幼稚園に皆様のご理解とご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2019 年 3 月 31 日
神戸親和女子大学附属親和幼稚園
園長 勝木洋子

2018年度 学校評価報告書

神戸親和女子大学附属親和幼稚園
園長 勝木 洋子

項目	重点目標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	幼稚園運営委員会でいただいた意見等
子ども一人一人の自立に向けた力を伸ばす	基本的習慣の確立	うがい用コップ・手拭きタオル・タオル掛けが導入され、それぞれの年齢にあわせた使用方法を工夫し、自分の持ち物を自身で管理しながら手洗い・うがいの励行をより促した。排泄については、満3歳児、年少は個人のタイミングを記録し、フリー教諭との連携、保護者との情報の共有が出来てきたように思う。年少で落し物や物がなくなる事が減り、年中はクラス人数が多いためか基本的習慣について一人一人への丁寧な関わりに課題が残った。年長は自分の事は自分で行うという意識比較的早く持っていたように思う。昼食時の異年齢交流などをしたが、縦割り活動の機会がもっと持てるようになった。	A	昨年検討された「親子で取り組もう」(約束表)の取組は導入できていない。年齢による発育発達段階が異なるので、年齢ごとのゴールをおくのがより理解されやすいので、細やかにお便りなどを通して伝えていきたい。今までコップ・タオルをロッカーに置いていたが、子ども自らが手洗いうがいを意識できるように、新たにコップ・タオルを掛ける備品を設置した。 タオル掛け、かばん掛けの工夫 子ども自身で管理しやすいような環境の設定	年齢ごとのゴールを置くことで、子ども・保護者や指導者にとって、わかりやすい取り組みになっていることが評価できる。 タオル掛け、かばん掛けの工夫や子ども自身で管理しやすいような環境の設定は、評価できる。さらに、音楽を流し、楽しく手洗い、うがいなどができる環境づくりも必要では。 今年度取り組んでいない内容を精査し、取り組んでいない中味を検証する必要があると考えられる。
	命を育む体験・環境体験の充実	植物の栽培や手入れ、飼育動物の世話など、各学年で分担して取り組んだ。飼っている小鳥の死をきっかけに命の大切さについて話し合い、考える機会があった。年長児は身近な虫の様子や生態について興味を持ち、図鑑やインターネットで調べ情報を友達と共有したり、保育室で飼育したりした。ゆりのき台公園や少し離れた公園に出かけたり、街探検をしたりと園外に出る機会を多く持った。年長児を中心に泥団子作りを体験し、園庭で年長児が下の学年に教える形で全学年にあそびが広がった。真冬の園庭で泥団子あそびに夢中になっている姿が見られた。 チルドレンミュージアム遠足や芋掘り体験など自然と触れ合う活動機会が多く持った。	A	今後も命を育む体験を積み重ねていけるよう、いろいろな場面で命について考える場を大切にしたい。小動物の命について全園児と話し合ったり、野菜や季節の花等に水やりをしたり、収穫をしたりするなど、5歳児を中心に保育に取り入れるようにした。ゆりのき台公園の環境をさらに活かし、自然の美しさ、不思議さなどに出会い、豊かな感性を高めるとともに体験の充実に努めていきたい。 当番表の工夫 子どもがわかりやすいような工夫	命を育む体験とは、どのような体験なのかを教員が事例を通して学び合う機会も必要では。 真冬の園庭での泥団子遊びのように夢中になって遊ぶ中に学びがあります。今後も夢中になって遊ぶ環境づくりを大切にしていきたい。 幼児期に小動物とかかわり、実際に飼育の経験は命と触れ合う大切な機会である。 自然の移り変わりや、四季折々に経験できる活動を保育の中に取り入れ、感性の豊かさを高めている事はとても良い意識だと考えられる。
	幼児の主体性を伸ばす保育の実践	「子ども達の主体的で対話的な深い学び」を意識した活動になっているかを、造形展・音楽会・生活発表会などの行事への取り組みを通して職員間で話し合いを重ねた。学年単位だけでなく縦横斜めの職員間のグループディスカッションや、終礼ノートの導入などでフリー教諭を含めての情報共有で、子どもたち主体の活動実践へのアプローチに努めた。テーマ学習においてのマッピング作り、掲示による保育の見える化など新しい取り組みがあった。	A	今後は、日々の保育の中でもアクティブ・ラーニングの三つの視点「深い学び」「対話的な学び」「主体的な学び」を踏まえた、学びの過程を意識して、保育に取り組んでいきたい。教師の指導案や記録をもとに、職員間のディスカッションを活性化するために情報機器を取り入れたい。	ここに示されているアクティブ・ラーニングの三つの視点が、保育活動の中での具体的な幼児の姿として捉えていく必要がある。 アクティブ・ラーニングについては、どのような環境の構成や援助が、幼児の「主体的・対話的で深い学び」につながっていくか、事例を通して考えてみる必要があるのでは。 継続的な取組により、子どもたちの言動に変化

					が見られたと思われるが、それらの変化を具体的に表現されたい。
項目	重点目標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	幼稚園運営委員会でのいただいた意見等
子ども一人一人の自立に向けた力を伸ばす	人権意識の向上	こども自身の思いを大切にした上で、相手の思いや気持ちに気づき考える機会を持った。お互いこどうすればよいかを一緒に考えていくといった過程を大切に、子ども達それぞれが自尊感情を持ち、他者への認めにつながるような話し合いの場を持つよう心掛けた。	A	職員自身が常に高い人権意識をもって日々の保育にあたり、保護者とともに取り組んでいけるように努めたい。単に色や男女で区別することがないよう、LGBTの人権にも配慮し、生活発表会の場でも話し合った。特に呼称は気をつけている。 リュック、かばん、靴袋など色で分けないようにし、子ども自身が選べるようにした。	子どもや保護者に望ましい人権感覚を啓発する意味からも、教職員がモデルになることが大切である。 幼児の道徳性の芽生えを培う上で毎日の保育の点検や保護者への啓発が欠かせない事であり、保護者と共に学ぶ機会をもつ事を年間計画の中にもりこんではどうか。 子どもの呼称については、「～さん」で統一することが徹底されており、評価できる。
	配慮を要する園児への充実	今年度よりキンダーカウンセラー制度が始まり、特別支援教育がより手厚く幅広く展開できるようになった。従来の県や市の巡回相談や、教育相談に加え大学より年間12回の臨床心理士による園内研修、保護者カウンセリングなどがあり子どもへのより深い学びに繋がっている。配慮を要する子ども保護者にとっても相談窓口が広がり、三田市や療育施設との連携や情報交換で子ども達へのより深い理解・支援ができるよう環境が整ってきた。市担当者より園の取り組み姿勢、各担任の面談時の対応にお褒めの言葉をいただいた	B	一人一人に適切なかわりをしていくためにも、医師や専門機関、大学との連携を充分にとるよう心掛けたい。 バリアフリーに関しては大きな課題がある。	医師や専門機関、大学との連携を充分にとりながら、一人一人に適切なかわりをしていることは評価できる。 キンダカウンセラー制度の導入により、子どもや保護者の行動の変容についても共有し、職員の資質向上につなげられたい。
子育ての支援	地域の子育て支援のセンター的役割	「わくわく幼稚園」「なかよしクラブ」にも担当教諭によるオリジナルプログラム、大学や外部講師を招いての親子教室など多彩な展開で 参加人数が増加している。当日にならないと参加人数がわからないのでプログラムの準備に工夫をしている。兵庫女子体育の連盟の講師派遣を活用し、親子の身体活動をおこなった。	A	今後も安全面に配慮し、それぞれのプログラムを充実させることが必要である。また、その都度、子育て相談に応じていきたい。参加者は月を追うごとに増加している。施設面で開催場所の課題もある。	現在行っている「子育て相談」を充実する支援が必要である。 様々な活動を立案されての子育て支援がなされている。 今後、子育ての保護者の相談について、テーマなどを設定して、地域の未周児へ親子への働きかけを展開して欲しい。

教員の資質向上に努める	幼稚園と大学との連携	園長先生の園内研修、植山先生によるリズムジャンプ指導などを受け、職員間での目標の高い設定と実践、そこでの反省や改善点の発見をし、自分一人で抱え込むのではなく職員全体の共通課題として問題解決に取り組んだ。活発にディスカッションし、園長先生、植山先生のアドバイスをいただきながら、同学年横並びの保育ではなく、独自の取り組みの場面が見られた。担任だけでなく、フリー教諭含めたチーム保育実践と造形展・音楽会などでの神吉先生・須増先生・角南先生の大学の先生にも指導いただき、教師の学びに繋がっている。	B	<p>日誌、指導案の開示をし、教員間で共通の課題として取り組んでいる。今後は、課題に向けて、研究するとともに、積極的に公開保育を積み重ね、学び合える組織を目指していけるよう努力したい。大学研究者との共同研究をし、附属園としての価値を高める必要がある。</p> <p>長期計画やゴールを目指す方法を全員で確認できていないので、新教育要領や10の姿をよく理解しながら大学との連携も含め共通理解したい。</p>	<p>学び合える組織を目指すためにも、園内研究会を充実させ、互いの保育実践のよいところを学び合うことが重要である。</p> <p>大学研究者との共同研究については、大学としても課題を認識し改善していきたい。</p>
	海外の方達と触れ合う体験	Tim先生の英語の時間だけでなく、イタリア・中国からの園訪問の方にその国の言葉で挨拶するなど、異文化に触れる機会に恵まれている。Tim先生のボランティアの保護者ランチタイムレッスンは大変好評である。今年中は尾教諭がカナダ研修に参加し、研修発表で園全体の学びに繋がった。	A	<p>開園にあたって、米国やカナダの附属幼稚園、小学校をもつ大学で組織される「国際附属校園協会」に加盟している。今後、子どもの自主性を重んじる世界基準の幼児教育の情報を共有し、世界を視野に入れた教育について、教師が学ぶことが重要である。</p>	<p>「国際附属校園協会」とは、どのような活動をしているのか、教員で共通理解をする機会が必要では。</p>
項目	重点目標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	幼稚園運営委員会で行った意見等
特色ある幼稚園づくりを目指す	音楽あそび	街に出て音探しをし、手作り楽器を作って音遊びを十分に楽しみ、楽器あそびをした。初めて触った楽器の音に感激し、お気に入りの楽器探しをしたりと音楽あそびは特に年中で活発に展開されていたように思う。年長児の音楽表現は、歌詞の意味を理解し気持ちを表現し、みんなで心を合わせ音をあわせて合奏する経験をした。	B	<p>音楽の専門家の指導を受けることで、子どもたちは、歌ったり合奏したりすることが楽しくなっている。また、子ども自身が楽しく、夢中になって体を動かしているリズムジャンプは、体力向上につながっている。子どもたちの姿を踏まえて、今後、幼稚園の特色を具体的に教育課程に位置付けていくことが課題である。</p> <p>これらの表現活動を兵庫県女子体育連盟60回記念フェスティバルに参加し、5歳児が表現活動を披露することができた。</p>	<p>今後さらに大学と連携し、3年間積み重ねてきた特色を発信していくとともに、教育課程に位置づけていく。その際、教員一人一人が教育の質の向上を図るという意識を持つことが大切である。</p> <p>附属幼稚園の強みとして、大学の人材や資源の活用をさらに進められたい。</p>
	リズムジャンプ	6月の運動会での発表に向けて、年長担任がリズムジャンプの研修を受け、子ども達も楽しみながら夢中で取り組んだ。年長児は取り組む度、リズムジャンプを通して体力がつき、粘り強く頑張る心や聞く力、課題解決に取り組む姿勢、挑戦する心など様々な学びにつながった。年長児の姿に憧れを抱く下の学年のお手本となった。			
	英語で遊ぼう	Tim先生の英語での絵本・音楽・体を使った表現で子ども達は英語の時間を楽しみにしている。保護者にも関心が高く保育参観の時間が増えている。			

家庭地域との連携	子どもの生活や発達の連続性を踏まえた教育の推進	<p>1学期の運動会は初の体育館での開催で、保護者にも概ね好評だった。個別懇談会を1回、2学期には希望者のみの懇談、3学期にも1回懇談とした。10時～11時を保育参観の時間とし、できるだけ普段の保育を見てもらった。普段から保護者と「おたよりノート」や面談でコミュニケーションをはかり、一人一人丁寧な対応を心掛けた。</p> <p>中学校区連携会議に参加し、幼・小・中共通の重点取り組み目標を掲げ、各学校園訪問で参観するなどの活動をした。</p> <p>ゆりのき台小とは従来の交流に加えて、防災の視点から密に連携を図り、中学生のトライやるウィーク受け入れ・高校生の模擬授業など多彩な交流の場を持っている。</p>	A	<p>1学期は、行事との日にちも接近しているので、2回の個人懇談会を1回にする。また、様々な家庭事情を配慮し、母の日、父の日の参観をファミリーの日と改めて保育内容を充実させる。</p> <p>今後も、近隣の小、中学校、高校との連携を深めるため、幼稚園側からも積極的にアプローチし、交流の場を増やしていけるように努力する。</p>	<p>昨年度改訂された幼稚園教育要領の中でも、小学校教育との接続が打ち出されている。幼稚園でのアプローチカリキュラム、及び小学校教育でのスタートカリキュラムの作成が必要となってくる。このような上でも、幼児の育ちを見据えた接続を考える必要がある。</p> <p>幼稚園側から積極的に働き掛けて、子どもの生活や発達の連続性を踏まえた教育の推進に努めていただきたい。</p> <p>園内での異年齢交流を充実させていくことが大切である。</p> <p>小学校との交流について具体的に進められたい。</p>
情報を発信する幼稚園	情報の積極的な発信の充実	<p>ホームページの更新回数、幼稚園ネットの活用機会を増やして情報発信に努めた。今年前半の災害時に、情報発信方法だけでなく、地域・小学校との情報共有の大切さを実感し、現状に合わせた発信方法・内容を工夫していく必要性を感じた。</p> <p>造形展では、課程をドキュメンテーションとして、保育室に掲示し、こども達だけでなく保護者にも取り組みの様子がよくわかると好評だった。門の掲示板も増やし掲示内容を多彩にし、門外の掲示板の半分は地域に発信する場とした。</p>	A	<p>今後は、ホームページの更新を頻繁にしていくよう努めたい。次年度は、保護者アンケートを実施し、改善できるもの、検討が必要なものから一つずつ見直ししていくよう努めたい。</p> <p>貼りだした写真はドキュメンテーションとして積み重ねていきたい。</p> <p>門の外の掲示板の活用を図っている。</p>	<p>保護者や地域の方々に情報を発信する工夫が見られる。発信した情報の反応をどう受信するかも一考を要する。</p> <p>保護者アンケートは時期や目的等を考えていく必要がある。</p> <p>「しんわだより」の趣旨を見直すとともに、読んで楽しく、子どもたちの学びや成長が伝わる「クラス便り」の検討をしてはどうだろうか。</p>
項目	重点目標	取組状況・成果・課題	評価	改善策	幼稚園運営委員会でいただいた意見等
幼稚園運営	安全管理・危機管理の徹底	<p>年間10回の避難訓練の実施はもちろん、園単体の安全管理だけでなく、地域との連携のもとでの防災対策にも取り組んだ。月1回の地域の防災会議に参加、ゆりのき台地区の防災イベントに参加協力。地域団体との交流で情報の共有ができ、防災についてもより強固な関係作りができた。</p> <p>AEDを使った救命救急講習、エピペンの講習会への参加をなどを通して教職員全員が正しい知識と対策を身に着けるべく努力している。</p>	B	<p>何よりも子どもの命を守るためには、今後も様々な状況を想定した避難訓練を実施したり、関係機関と連携をとり、実施訓練をしたりすることは重要である。</p> <p>4月より、保護者は送迎時に保護者証を身に付けるので、防犯対策の一環であることを意識付けていきたい。</p> <p>昨年度3月末より門の付近に警備員の配置をし、安全管理を向上させている。</p> <p>発災時の危機管理マニュアル（乳幼児用品の備蓄も含めて）を作成すべきではないか。</p>	<p>子どもが危険を回避するためには、状況に応じて機敏に体を動かすことが必要である。日々の保育の中で、意識して取り組んでいただきたい。</p> <p>さまざまなアレルギー症状を持つ子どもが増えてきている。アレルギー対応の研修会に積極的に参加し練習用のエピペンを体験するなど、教職員全員が正しい知識と対応を学んでおく必要がある。</p> <p>危機管理マニュアルの作成が重要な課題かと思う。インシデント・レポート（起こった事故例、事故になりそうな事例等）を収集して、事故予防に備えることが大切である。</p> <p>安全管理・危機管理に関して、様々な観点から尽力されていて、大いに評価できると考える。</p>